

平成19年度「食育月間」食育フォーラム
～広げよう！子どもの農業体験！～

- 1 開催日時：平成19年6月27日(水) 10:30～12:30
- 2 開催場所：さいたま新都心合同庁舎2号館5階共用大会議室501
- 3 参加人数：200人
- 4 内 容：
講 演
テーマ：食育の推進と農業体験の重要性
講 師：奈須正裕氏（上智大学総合人間科学部教授）



事例報告

報告者：加藤博司氏（(有)加藤ファーム代表）



つるた
：鶴田光男氏（やきつべの里フォーラム事務局長）



平成19年度「食育月間」食育フォーラム
～ 広げよう！子どもの農業体験！～

平成19年6月27日

平成19年度「食育月間」食育フォーラム ～ 広げよう！子どもの農業体験！～

日時：平成19年6月27日（水）

10：30～12：30

会場：さいたま新都心合同庁舎2号館

5階共用大会議室501

プログラム

1. 開 会

主催者挨拶 関東農政局

伊藤 健一

2. 講 演

上智大学総合人間科学部教授

奈須 正裕 氏

「食育の推進と農業体験の重要性」

3. 事例報告

(有)加藤ファーム代表

加藤 博司 氏

やきつべの里フォーラム事務局長

靄田 光男 氏

4. パネルディスカッション

・コーディネーター

上智大学総合人間科学部教授

奈須 正裕 氏

・パネリスト

(有)加藤ファーム代表

加藤 博司 氏

やきつべの里フォーラム事務局長

靄田 光男 氏

5. 閉 会

1. 開 会

伊藤関東農政局長 関東農政局の伊藤です。主催者を代表して挨拶をさせていただきます。政府は毎年6月を食育月間として、食育につきましては今後も毎日進めていきますけれども、特に6月を食育月間として進めております。今日はその中心的なイベントとして食育フォーラムを開催するということです。本日のテーマでありますけれども、今年のテーマは「広げよう、子どもの農業体験」といことに致しました。

今日は後ほど上智大学の奈須先生、そして、地元で食育を支援していただいております加藤ファームの加藤代表、やきつべの里の靄田事務局長から事例の報告をしていただきますけれども、この様なテーマとさせていただきました趣旨を若干お話しさせていただきます。

食育の中には心の問題もあれば知識ですとかあるいはいろいろ生きていく上での技術的なものもちろんありますけれども、今回こういうテーマにさせていただいたのはやはり食育の原点は子どもの心の教育ではないかというふうに考えているからということでもあります。感受性のある心の豊かな子どもを育てることが食育の原点ではないかと。

そのための特に大事なことが農業体験というようなことを通じまして、食べ物を生産することの大変さ、あるいは食物のありがたさといったことを身をもって体験をしていくと。それを子どものうちにやっていくことが大変その後の食に関する認識についての基礎になってくるのではないかと考えております。そういう意味で今日は食育の中でも特に子どもの農業体験ということテーマにさせていただいているということでもあります。

この子どもの農業体験ということにつきましては、正直言いまして政府全体としての支援が必ずしもまだ十分できていないということでも、実際に活動していただいているのはボランティア的な取組をしていただいている方が中心になっているという段階でございます。やはり子どもの農業体験といった活動をもっと強く支援していかなければいけないなというふうに感じております。

そういう認識の下に、農林水産省の中に「教育ファーム推進研究会」というものが9月に設けられましていろいろなことを検討されておりますけれども、その中でこういう活動に対する支援というものをもっと具体的にすべきことはないのかということも含めて今検討が進められているという状況であります。

そういう中で今日のフォーラムを通じまして、特に子どもの農業体験を進めることの重要性、そういうことについて認識が深まって取組がさらに拡大するということを期待しております。

以上、簡単でありますけれども、冒頭のごあいさつとさせていただきます。今日はよろしくお願いたします。

2. 講 演

司会 それでは、本日のスケジュールですけれども、初めに上智大学総合人間科学部教授の奈須正裕様から「食育の推進と農業体験の重要性」というテーマでご講演いただき、引き続き子どもの農業体験を実践している2名の方から事例報告をいただき、その後3名でパネルディスカッションを行っていただきます。

本日のフォーラムはおおむね12時半をめぐりに終了する予定となっておりますので、進行にご協力いただきたいと思います。

また、本日のフォーラムの意見交換の概要につきましては関東農政局のホームページに公表させていただくこととしておりますので、ご了承ください。

それでは、早速ご講演に入りたいと思います。お時間は50分を予定しております。

上智大学総合人間科学部の奈須教授、よろしくお願いいたします。

奈須教授 どうも皆さんおはようございます。上智の奈須です。

食育、このところすごく広がりを見せてきてありがたいなと思っております。だんだん広がってきたということで喜んでいるわけですけれども、同時にではこれから何が課題かということ、どういうふうに突破していくかという話をしていこうと思います。

最近、食育に取り組んでくださる方がどんどん増えてきて、また関心も高まっているんですけれども、こうなったときにこそ気をつけなければ、追い風するときこそ気をつけなきゃいけないというのがこういうことの常でして、今課題は深まりや高まりをどういうふうに確保していくかということではないかと思えます。広がりを得ようとしていく中で、活動や学びの質がおきざりになってきやすいということはもう教育界では常でして、最近で言うと総合的な学習の時間というのが平成10年からスタートして動いています。総合学習というのは何か新しいものだというふうに誤解している方がいますが大間違いで、大正時代から実は草の根でやられてきています。今日のカキ農場ややきつべの里さんも食育基本法が成立したから始めたわけじゃなくて、それ以前から、自分たちでとにかく大事だと思ってやってみえたわけで、いろいろな障害を乗り越えてやってきた。そういうことは実は総合にもあって、大正時代から、子どもが暮らしや生活をしっかり学習していく場が学校教育に必要だという中でやられてきています。長野県や奈良県なんかを出発点にして昭和もずっと広がってきた。これは日本だけじゃなくて、アメリカなんかでも19世紀の終わりからもう取組がなされてきています。ですから、これは何もはやりすたりではなくて、子どもの暮らしや生活にかかわる学習の場を教科、つまり科学や学問や芸術を学習する場と同時に学校の中に置く、そういうカリキュラムを作るという教育の原理なんですね。もう100年も前から、そのことに気づいた人がいて、草の根でやってこられたわけです。

では、何で平成に入ってそれがにわかに国家政策に入ったかということ、それぐらい子どもの生活が危なくなってきた。政府も見えてもらえないほどにですね。ただ、生活を置き去りにしてい

わゆる勉強だけしても子どもは育たないという原理は、もう100年も前から気づかれていることだということは強調しておきたい。

最近フィンランドの学力が高いということがよく話題になりますが、実を言うとフィンランドも同じで、フィンランドにはスロイドというシステムがあって、これは食育ではないんですが、木工を中心とした手工をやるんですね。これも19世紀から20世紀の初めに近代工業生産、大量生産大量消費の考え方がフィンランドに入ってきて、こういうことではいかんということに気がついた人たちがスロイドといいます。手工を学校教育の中に入れて、スウェーデンの家具とか立派ですよ、安くはないけれどもすごい技術と良い材料を使ってきちんと作るというやり方で今人気ですけども。日本で言う民芸に相当するような、ものとしていい生活造形品を作って大事に長く使うという考え方。それが大量消費社会に流れようとしたときにそれじゃあいかんということになってきた。それを教育的に実現しようとしたのがスロイドで、今でもスウェーデンやフィンランドの学校ではスロイドの授業が随分な時数行われています。

そういうことが実は学力が高いということに影響しているのではないかというのが最近言われていて、日本では余りそういうことを問題にしないんですね。図工なんかやったら算数の学力上がらないう感じ。そんなことない。要するに暮らしを見つめてそういう循環型の暮らしということを考えていく。足元をしっかりと見つめて生きていくという力、あるいは人とつながって生きていくという力が実は教科学力も高めていくんですけども、そんなことに19世紀や20世紀の最初のころから気がついてた人がいるんですね。しかし、世界全体としてはその後いよいよ大量消費社会になってきて、子どもたちの様子も目に見えて危なくなってきた。さすがに何とかしなきゃいけない。総合的な学習の時間もそうだったんですね。

ところが、国中でやろうということになると、何か知らんけれども、よくわからんけれどもやっておきましょうみたいな人が増えてくるんですね。当たり前ですけども、全部の学校でやらんといかんもんだから。子どもにとっての意味や、あるいはそういうふうにするためにはどういうふうにすればいいかという具体的な方法を考える力がない人たちも残念ながらやるわけですね。広がるってそういうことですね。だから、すそ野が広がるということはそのまま頂点が伸びていくとは限らなくて、質のよくない実践や趣旨と離れた実践が増えてくるというリスクを常に負っています。

現に残念ながら総合的な学習はなかなか質が高まらないということがあって、質が高まらない実践を近くでやるもんだから、みんなあんなことならやらん方がいいじゃないかというふうな話にもなってくるわけですね。そうすると、その前から大事だと思ってやっていて成果を挙げてきた、草の根でやってきた人たちまで否定されるようなことになって、非常に残念なことです。今、教育課程を議論中ですが、生活の教育の意味がわかって大事だと支援してくださる方も数多くいらっしゃいます。文部科学省内では、もちろんしっかりと意味がわかってやっているのだから大丈夫かと思うんですが、新聞なんか無責任にうるさいですね。食育を絶対そうしち

やいかんと私は思っています。総合に少しかかわってきたので、食育がその二の舞になっちゃいけないなど。

だから、こういう追い風の時期にこそ気を引き締めて、質の向上、本当に確実に子どもが育つような実践をやっていかないと。そのためのポイントは何かということ、早い時期から議論していくということが大事だろうと思います。

よくね、とりあえずでも始めることが大事だ、まずはやろう、そのうち頑張ろうというんですけれども、とりあえずビールといいながら最後までビール飲んでみたい、そういうことになりがちですので、とりあえずで始めないで、しっかりと質を高める方向に意識を向かわせながら、食育を始めたい。

それから、これは今日農政局の開催なのであまりどうかとも思うんですが、どうしても僕ら広がったかどうか、推進ということ、数字だけで議論しがちです。例えばあまり食育に取り組んでいない県や総合計画を立てていない地域がこれだけあったのが、総合計画を立てた地域が何%増えたとか、参加人数が何万人から何十万人に増えたとか、そういうことがどちらかといえば成果として気になるし、それも非常に大事なんですが、それは最初の何万人と同じ質で何十万人に増えたかどうかということがやはり重要です。子どもが育たなきゃ何のためにやったかわからんですのでね。そういうことをちょっと今日まず提案したいなと思っています。広がりを見せると同時に深まりや高まりが課題ではないか。

(スライド)では、深まりや高まりをつくるためにはどんなアプローチが望まれるか。そのことを考えるために、食育における3つのアプローチを検討してみましょう。実際にどんなふうにプログラムが展開され、方法が工夫されているかということ、どうも私3つスタイルというかアプローチがあるような気がします。

1つ目は、知識の教授や体験の提供。2つ目は、しつけで行動を調整し、望ましい行動を形成していく。3番目は子どもが問題解決をしていく。1つずつ見ていきましょう。

(スライド)何はともあれ、食行動に問題があるとすれば、それは支える知識が不足している、体験がないからだということはだれでも考えつくことです。実際、体験や知識は重要です。ただ、それだけでは暮らしが変わっていくところまではいかないんじゃないか、これは僕らが常に悩んできたことです。

例えば議会制民主主義という言葉は社会科の中核の言葉で小学校の終わり、それから中学、高校でも繰り返し教えます。でも、議会制民主主義をあれだけ詳しく教えてテストでもよくできるのに、投票には行かないわけです。若い人の投票率はどんどん低下しています。議会制民主主義を知ってれば、それをうまくやるためには私が投票するという行動が不可欠だということになるはずなのに投票に行かない。つまり、知識が行動に結びつかない、知識と暮らしが乖離しているということですね。これ社会科の敗北だと、私は思っています。投票率が上がって初めて社会科は意味がある。ちゃんと税金や年金を払って社会科は意味がある。それができな

い。いくらものを知っててもだめじゃないですか。

道徳なんかもそうです。もう泣きながら「先生、あしたからこうしていきます。」と言って、帰りはもう違うことをしていると。それじゃだめでしょう。そういう教育がいかに弱いかということは僕ら体験的に知っています。文部科学省でも「生きて働く学力」ということで、知ってても行動に結びつかないとだめだと考えてきた。食育ももちろん行動に結びつかないとだめで、知ってますじゃだめなんですね。食行動が実際に変わらないとだめです。

そうすると、知識や体験だけでは弱いかもしれない。それが生きて働くようなものになっていくにはもっと別なポイントがあるんじゃないかと思います。家庭科はよく頑張ってくださいますが、何でだめなんだろうと思うんですね。家庭科もむしろこのところどんどん充実してきて、高等学校でも男女共学になってますよ。なのに何で食行動に問題が増えているんですか。つまり、知識だけでは弱いということですね。残念ながら。それがいらんというわけではないんです。体験の提供や知識の教授は重要ですし、家庭科はそれを担ってきてくださっていますが、それだけではまだ弱いということだろうと思います。

私にも失敗があって、総合の立ち上げの時期に福祉の学習をしようと思って、子どもを無理矢理というか、老人ホームに連れて行って交流活動を一緒に組んだことがあります。子どもはやさしいですからおじいちゃん、おばあちゃんといるときは本当にいろいろかかわってよくやってくれます。老人問題を深く理解したかなと思って私も一緒に帰ってきました。いや、聞かなかったらよかったと思うんですが、帰ってきた廊下で男の子が3人言うんですね、「ああ、疲れた。二度とじじいの面倒なんかみるもんか。」と。いや、愕然としましたね。体験をすれば人間が変わるということではないですよ。

昔、勤労生産学習というので、やはり今の食育につながるような農業体験とか随分やった時期がありますが、勤労生産学習をやればやるほど、ある子どもたちが言ったというんです。「先生、今日、勤労生産で田んぼに行ってよくわかりました。しっかりこれから僕は勉強していこうと思う。」勤労生産で将来展望ができたかなと思ったら違うんですね。「もうあんなだるいことは二度とやりたくないから、涼しい部屋で楽な仕事ができるように僕は受験勉強を頑張ります。」と言うんですね。もう愕然としますよね。

つまり、体験が子どもにとって僕らが望むような意味を彼らに伝達し得るかどうかというのは、よほど吟味していかないと裏目に出ることすらあるということです。農業体験をさせればさせるほど農業を否定的に見ることだってないわけじゃないです。そこを気をつけないといけません。それが質ということですね。まず体験がないと始まりません。土も触ったことないではどうしようもないですからね。でも、土を触らせればそれでいいというのではないということだろうと思いますね。

では、次にいこうと思います。次によく言われるのがしつけによる行動調整です。ほめる、しかる、あるいは習慣づける。今、早寝早起き朝御飯運動なんていうのが展開されてますけれ

ども、もうとにかく理屈はない、とにかくそういうものだということを習慣づけて癖にするということによって望ましい食行動を形成しようというものです。

これは短期的には効果絶大です。ただ、問題があって、何でそうするのかという理由を自分の頭で考えずにやっています。あるいはあるパターン化した行動をしつけるんですね。すると、まず、学校でそういう望ましい食行動をしつけても、家庭、社会では違うように動いているとすれば、そこに乖離が起こりますね。だって、学校の給食なんか本当にきちんと配膳してごあいさつしてちゃんと食べます。あるいは三角食べなんて、ちゃんとバランスよく食べるなんていうこともやっています。ところが、家でそういうことをやるような環境にお父さんお母さんがやってくれるか、地域でそういう環境があるかということそうじゃない。となると、子どもはその環境に合わせます。家や地域では学校とは違う振る舞いをします。つまり、子どもはただ場面によって使い分けのだけです。理由がわかっていない、ただ形だけでやっていると、違う場面にいくと違う形に順応します。しかもずっと学校にいるわけではありません。学校は卒業します。そうしたら、家庭や地域の環境に子どもはただ合わせるだけです。そうすると、せっかくしつけでも、それは学校にいる間だけのこと。大学に入ってきたうちの学生と一緒にですね。大学に入った途端に、もう勉強は終わった終わったとあって、二度と勉強なんかするもんかと。いや、困ったものですが。それは勉強する意味がわかっていない。自分のものになってないから連続しないんです。

食育もそうです。単なる行動としてしつけたって、意味がわからずしつけると、ああ、もうあんな窮屈なところを出てほっとした、みたいなことで、もうそれはファーストフードに走りますよ。それじゃあ弱いんじゃないかと。

それから、想定外の事態に応用が効かない。パターンでこうしろと言われるだけですから、状況が変わったときに応用が効かないことになるんじゃないか。これから食をめぐる状況は変わらないかということ、どんどん変わるんじゃないですか。変わっていったときに、原理的に理解し応用できるような技術として身につけていなければ、新しい環境の中で望ましい食行動をつくり上げていくことはできないじゃないですか。いつまでも僕らが生きているわけじゃないですから。子どもたちが大人になって社会の担い手になったときに、その環境の中で、世界の中で、望ましい食行動を実践できる、さらにその子どもたちに伝えていけるようにするには、応用が効く力にしておかないといけない。そのためには、ただ昔からこうやってきて困らなかったよという行動様式をしつけるだけでは弱いんじゃないかと思うんですね。

加えて、唯一絶対の正しい食生活というのはあるだろうか。ちょっとこれは重たい問いです。食育を巡って「このくらいは常識だ」「普通だ」という言葉がよく聞かれます。あるいは「昔からそうしてきた」ということがよく聞かれますが、本当に昔からそうしてきたんですか。あるいは本当にそれ常識なんだろうか。つまり、僕らがやってることを常識で普通で普遍なことだと、変わらないんだというふうにするということは、逆に少しでもそうじゃない人に対して

排他性を持つ可能性がある。日本も今後どんどん多文化化していきます。国際化していきます。そうなったときに、日本の伝統的な食行動や文化とは違う文化背景を持っている人たちと身近に暮らしていくということがどんどん起きてくるわけですが、そのときに「それぐらいは普通だろう」「常識だろう」ということが広がると、それは異文化に対する排他性を生みかねない。あるいは新しい創造的な、しかも原理的には望ましい、いろいろな食の文化や食行動が生まれていくことに対して排他性やある種の行き過ぎた保守性を持ちかねないんです。

随分難しい問題ですが、でも大事じゃないかなと思っています。望ましい食行動とか、原理的にこれはいいじゃないかと思える食行動というのは、もっと多様にあるし、僕らが見たこともないようないい食行動というのも今後だれかが生み出してくるかもしれない。そういう余地も含めて、単に今僕らが知ってる行動に限定してしつつけるということでは弱いんじゃないかなと思います。その意味で、社会や時代の変化に耐えられる食育を望みたいなと。

いよいよ3つ目ですが、それは問題解決学習です。実は問題解決学習というのは、大正時代から総合学習や生活教育をやってきた人が原理にしてきた教育の方法です。もう80年、90年の実績があって、今の文部科学省では「問題解決的な指導」という言い方で、総合だけでなく教科も含めた授業づくりの原理にしております。

先ほどお話しした知識教授としつつけに共通する弱みは何かというと、主体による思考の欠如ではないかと思うんですね。自分自身でこれはどういうことかな、こんなふうになればどうだろうというふうに考えたり、工夫したり、それがうまくいったかどうかを自分で評価する、見つめてみたり試行錯誤してみたりという、それがどうも弱いんじゃないかなと思う。これはこういうことだよと教えられる、こういうふうにしなさいとしつけられる。自分の頭で考えてない、だから暮らしに生きないし応用が効かない。暮らしに生き、応用が効くためにはやはり自分の頭で自分の事としてしっかり考え、決着をつけていく、1つ1つのことに自分なりの納得を求めていくということが大事ではないかと思いますね。

そのためには、自ら発した切実な活動の中で骨身にしみて思い知るということでないと弱いんじゃないかなと思うわけです。ではちょっと具体的にどういうふうにやるのか、次お願いします。

(スライド) 問題解決学習というのは、こんなふうに典型的には進めます。まず、子どもがやってみたいことや気になることがあります。子どもの求め、夢や願いや気がかりといったことですね。例えば、クラスで自分たちの手でお米を作っているいろいろな世界のお米料理に挑戦してみたいなと子どもたちが考えたりしますね。例えば、先生が学校の農園というか田んぼが校地の横にあるんだけど、あそこで何かしてみないか、どんなことをしてみたらいいかなと行ってまず子どもに相談する。先生がいきなり「はい、来週田んぼに行きますよ。」「何で。」「とにかく、どうしても。」と、それじゃあだめですね。子どものものになっていかない。もちろん、放っておいても子どもは田んぼをしたいとは言いません。投げかけはしていい

んですよ、あそこに使ってない農地があるんだけど、1年間そこで頑張っただけで何かやりがいのある活動をやってみないか、ゆっくり考えようじゃないか、どんなことをしてみたらいいかな、といった具合ですね。夢や願いを熟成して、みんなで相談して共有できるものを決めていくわけです。

例えば「じゃあ、先生、お米を作っているいろいろなお米料理作ってみたいな。」と言うかもしれませんが。そのときに、「ああ、そうですか。じゃああそこの田んぼをいつまでに耕しておくから、いついつ田植えしようね。苗の段取りは先生が」Aさんに頼んでやっておくから。」と、これじゃあだめなんですね。子どもは何も考えない。「ああ、そう。」とって、もう二度と考えませんね。田植えまで何も考えないでぼんやり田植えに来るんですね。

そうじゃなくて、「あ、そう。先生ね、田んぼはあるんだけど、実は先生も農家じゃないから田んぼやったことないんだけど、みんなどうしようか。」と言う。「先生、知らないんですか。」それはそうかもしれないですね。「じゃあ、先生田んぼのやり方知らないから、やめる？」と言えばいい。すると、「いや、やる。」「どうする。」「じゃあ、僕らで考えて調べてきます。」と、子どもは自分がしたきゃ自分で調べますよね。今度DSの新しいゲームソフトが出ると聞いたら、どこが一番安いか子どもは上手に調べますね。問題解決学習ってそういうことです。自分が求めることがあれば、それに対して必要な手段的知識や技能は上手に獲得していきます。うちの子も勉強なんかしないけれども、今度出るソフトはどこが安いとか、どうやって攻略すればいいとか上手に人とつながって情報集めてきますね。それが問題解決。何も問題解決学習なんて難しい言葉で言わなくても、ごく普通に間というのはそうやって知識を得たり技能を得たり頭をめぐらすものです。それを、ソフトを買うじゃなくて、教育的に望ましい方向に向けてやればいいんですね。

例えば「先生は田んぼをやったことないけれども、どうする。」「じゃあ、僕らやってみないから自分で調べる、考えてみる。」「先生、お隣のおじいちゃんがやってるから聞いてくるわ。」「先生、」Aさんに聞いたらいいいんじゃないかな。」とか。Aに電話するのにどうすればいいかなと電話番号調べて電話かけて。いきなり電話かけてもわけわからないですよ。どんなふうに電話で聞けばいいか、シナリオというか、「もしもし」と、次に「こちらは何か小学校の5年生です」そして「こんなことしようと思います」とか「これ聞きたいです」と、ちゃんと、言えないといけない。これは国語の勉強になりますね。お尋ねの仕方をどうすればいいかというのをみんなで話し合う。

あいさつができない子どもというのも問題になっていますけど、あいさつを切実なものとして、あいさつをしなきゃならんという場面を経験してないからしないんですね。あいさつ運動なんていくらやっても身につかないですね。でも、そうやって自分らが知りたいことであるお世話になったら、子どもは何も言わなくても「ありがとうございました。」と言いますよ、「お願いします。」とちゃんとと言える。先生が「お願いしますを言いましょう」なんて言

わなと言わないのは、自分事になってないからです。

かくして、田んぼを借りたり、田植えの準備のことでいろいろな人にお世話になる。すると、僕らが生きてるということは、いろいろな人のお世話になってるんだな、地域にいろいろな偉い人がいるな、あの人尊敬できるな、あんな大人になりたいな、などとさまざまなことに気づいたり考えたりする。人とかかわり、地域に愛着を覚え、大人を尊敬するようになりますね。皆さん大変な仕事をしてるんだなと。うちの父ちゃんは日曜日ゴロゴロしてるけれども、金曜日までは立派に働いてるんだなと。日曜日くらいのんびりさせてあげようかなと。そういうふうに親の見方も変わってきます。

そのうち、農薬をどうしようかというような問題が出ますね。虫がいっぱい出てきた、これ放っておいたらだめになる、農薬どうしようか。」Aさんに聞いたら「農薬は今いいのができてるから量をちゃんとやれば大丈夫だよ。」と、農家に聞いても「大丈夫だよ」と言うんですが、農家の人がつい口滑らせて、「うん、農薬は大丈夫大丈夫。まいても大丈夫だよ。うちで食べる米は農薬まかないけれどもね。」なんて言ったりするから、「え、どういうことかな」とまた調べたりします。無農薬や減農薬に取り組んでいる人とか、いろいろな人に聞いて回ったりします。

じゃあ、自分らは農薬まこうでもいいし、まかないでもいいですね。まかなかつたら大変ですね、虫取るの。ある学校で農薬をまこうとってまいたんですよ。そうしたら、翌朝虫がいっぱい死んでるんですね。それを目の当たりにする。ああ、その命を僕らもいただいているんだということに気づくんですよ。あの虫1匹1匹の命もいただいて米があるんだと子ども言っていましたね。粗末にできないと言ってね。

同時に「じゃあ、先生、今度は農薬をまかんでやってみたい」と、キャベツに農薬をまかないでやったらもう青虫だらけ。子どもは人海戦術で青虫を毎休み時間に取りわけですが、子どもは言いますよね、「先生、僕らはひまだからいいけれども、農家の人たちは無理だ、これは。農薬まくのもしかたがない。」農薬がいかんという話じゃないですね。それは無理だと言いましたね。おもしろいもんです。

そうやって1つ1つ自分事として問題解決する中で、何でそうなるかとか、その人たちはどういう思いでやってるかとか、どうしてそういう社会の仕組みになってるかとか、腹の底からわかってくる。でも、まださらにいいやり方はないかといって、今の僕らの社会の現状を超えるようないい解決はないかとすら思いをめぐらしていきますね。そういう子どもにしたい。水の管理なんて難しいですね。自分のところだけじゃないですからね。自分の田んぼはこういうふうにしたい。でも上の田んぼと下の田んぼのことがあるわけで、「ああ、そういうことがあるんだ」と、自分の都合だけじゃないぞということがわかってくる。そして、田んぼは、その地域の人たちが譲り合ったり考え合ったりしながらやってきたんだな、すごい知恵だなと、思い知る。そして、最近この地域にはそういうことが少ないな、残念だなといって、食や農だ

けじゃなくて、それを越えて地域や共同体のあり方を見つめたりする。そして、もっと望ましい社会を構築しよう、その責任は僕らにあるぞという、市民としての自覚なんていうことも生まれてくるんですね。おもしろいです。

このようにして、自分事としての学びが起こってきます。食べ物があるのはただ事じゃないぞ、自然と共生するすばらしい知恵が農家の人たちにはあるぞ、日本の農業はそれでも厳しい状況にあるな、何であんなに頑張ってるのに厳しい状況にあるのかな。僕らが大人になったら何とかせんといかんぞと。そうすると、投票に行くんですね。そういうことがないから投票に行かんですよ、正直言うと。自分事だと思ってないからね。

こういうのが問題解決学習というやり方です。

さて、伝統的に問題解決学習というやり方で暮らしの勉強、食育も含めた地域社会における生活の教育というのをやっていきたい。それが総合的な学習の目指すところでもあったわけですけども。それでは、さらにもう少し細かく、原則、原理のようなことをお話ししておこうと思います。

(スライド) 私は小学校でカリキュラムを作ったりするのがメインの仕事なので、お集まりの方からするとちょっとそれをどう自分らに生かすかというのは距離があるかもしれませんが、今日は学校の話ということで聞いてください。

問題解決学習の原則。まず、大きく分けて3つあるかな。1つは、問題は子どもが解決する。2つ目は、活動は本物を目指す。それから、ただ放ったらかすんじゃなくて、やはり教育ですから意図性や指導性は発揮する。この3つの原則があるかなと思います。

もう少し詳しく見ていきましょう。

(スライド) まず、問題は子どもが解決する。先ほどもお話ししましたが、問題は先生が解決しちゃだめです。「田んぼですか、じゃあ準備しておきましょう。」と、それじゃだめですね。そんなことやるから先生がどんどん忙しくなって食育なんかやってられるかとなるんですね。問題は子どもが解決する。そうすれば、先生はそんなに忙しくないんです。

例えばこんなことがありました。生活科で食べ物づくりをよくやります。例えば1年生や2年生でもクッキーづくりなんていうのをよくやったりするんですけども。先生が全部やっちゃうんですね。難しいところ。ここは難しいなとか、ここは危ないなというところはみんな先生がやっちゃってね。それで「クッキーがおいしくできましたね。」「はい、おいしくできました。」と子どもはクッキーを喜んで食べるんですね。本当は難しいところは全部先生が黒子になって解決しちゃっているんですが、子どもは自分でやったと思っています。「今日はクッキーがおいしくできましたね。」「はい、すごくおいしくできました、先生。」「どうですか。」「おいしいです。」「何か気がつきましたか。」「いえ、別に。」「何も気がつきませんよね。自分がしたいことが自分の力でできたら何も考えないでしょう、人間。自分がしたいことができない「あ、どうしてだろう」と思って、それを「こうすればいいんじゃないか」と思

って解決したら、「ああ、こういうことが大事だ」ということがわかったとなりますね。

人間が学ぶというのはうまくいかなから学ぶんですね。うまくいけば学ばないんですよ。だから、失敗とか困難に出会うと学びます。活動が順調に進むと何も学びません。よく教育ファームとか食育でもあるんですが、子どもでは難しいな、子どもだと失敗するぞというところはみんな大人がやってしまうとか、あらかじめプログラムで解決しておくということがよくありますが、あれでは何も学ばないんですよ。あれを支援とか援助だという人がいますが、それは活動を支援しているんです。活動を支援している。そして、結果的に学びを妨害しているんです。活動を支援することが学習だと思ったら大間違いで、活動を支援しちゃうと学習が起きないんです、活動がうまくいっちゃうから。

だから、出会うべき困難や失敗に直面するということが大事です。学びを支援するためには活動を支援しすぎないことが大事です。出会うべき問題にぶつかって子どもが自力で乗り越える。その中で学びが生まれるんですね。これが原理です。

例えばこんな実践がありました。子どもが肉まんをつくりたいと言うんですね、2年生の子どもが。「先生、2年生の子どもに肉まん上手に作らせるにはどうしたらいいですかね。」と言って先生から僕のところに電話がかかってきた。「先生、もう最近私肉まんて夜も眠れませんか。」と。(笑)真面目な先生ですね。先生ってだいたいそうなんですよ。残念ながら無駄な真面目さです。お母さん方とかファームの人もそうじゃないですか。この短時間でどうやってうまくやろうかと、そういう問いの立て方は間違いですね。僕は嫌味だから、「そうですか。先生がそんなに夜も眠れんぐらいだから子どもは不眠症ですね。」と言ったら(笑)、「子どもは高いびきですよ。」と言うから、「おかしくないですか。」と言った。「ああ、そうだ。おかしい、理不尽だ。」と、その先生。おもしろい先生で、「じゃあ、子どもにやらせる。」と言って、おもしろい先生で。

それで、子どもたちに聞いたんだそうです。「肉まんは難しいけれども、何か先生がお手伝いすることないですか。」と。すると子どもたちは「大丈夫、大丈夫。」と言うから、「あ、そう、じゃあ頑張ってやってね。」と言って。そうしたら子どもたちは発酵のところでつまづいちゃって。発酵させなきゃいかんのに、発酵って何だろうと、よくわからないから冷蔵庫に入れちゃった、お母さんがつくってたプリンか何かと勘違いしたんでしょうね。発酵するどころかベチャベチャになっちゃってね。ベチャベチャな肉まんなんか食べられたものじゃないですよ。半ベそかいてました。

こうなると、子どもでも言うてくるんですね、「先生、来週もやらせてほしい。」と。自分がやりたいもんだから、その1週間子どもはすごい調べましたね、発酵について。もう図書室行ったりお母さんに聞いたり本調べたりして、絶対今度はと言って、リベンジですね。かくして翌週にはふかふかの肉まんができる。ほかのグループもおいしそうだから「それにはどんな工夫がありますか。」と尋ねるんですが、子どもたちは偉そうに、「えへへ、これは発酵と言

うんです。」とあって、先週わからなかったくせに偉そうに発表しますね。もう得意ですよ、問題解決してるから。これ以外にもパンやチーズやヨーグルトも発酵ですよって偉そうに発表する。そうすると、回りの子どもは、発酵で今度は何か作ってみたいと。じゃあ、来週はほかのグループもパンをやってみよう。こうやって学習というのは深まっていくんですね。こうやって子どもたちが自力でどんどん深めていくんですね。だから、そのためには問題解決をさせる必要がある。

ただ、ここで大事なのは、最初にも言いましたけれども、子どもがやりたい活動でないとダメですよ。そうじゃないと「みんな、肉まん作ってみたい。」「何で。」「いや、いいと思うよ。」「先生が言うからやるか。」「先生、ベチャベチャになりました。」「来週もやりますか。」「二度といいです。」となるでしょう。だから、子どもが求める活動、やってみたいという夢や願いの中で食にかかわるいろいろな体験や活動を組織するというのが原則です。そうすると、困ってもへこたれないで頑張る。結果的に学びが深まるんですね。

つまり、ぶつかったらもういいやとなるのは、もともとやりたくない活動だからです。だから、やりたい活動にして、突き放して乗り越えさせるという中に深い学び、自分事の学びが生まれてくる。これがポイントになってきます。

では、次いきます。2つ目の原則ですが、「本物」を目指すというのが大事な原則だと思います。どうしても僕ら、活動や体験を組むときに、まあこれは小学生用だからとか考えて、つまり皆さんが実際に農業でやっていたり、食べ物づくりでやっている水準がありますよね、本物の。ところが、子ども用にしちゃうでしょう。まあ、5年生だからこんなものかなとか、まだ低学年だから無理でしょうと、問題解決学習で一番大事な困難に出会わないくらいにまで水準を引き下げちゃうんですよ。これが間違い。

生活科では豆腐づくりというのをよくやるんですが、大豆から豆腐。すごくおもしろいんですよ、豆腐づくり。4時間ぐらい午前中いっぱいかけて一生懸命やって、「先生、豆腐ができた。」と言って持ってくるんですよ。もちろん消しゴムのかすみみたいな小さい豆腐ですよ。それを先生がね、「はあー、立派な豆腐だね。この間見学に行ったお豆腐屋さんにも負けないね。」とこんなこと言うんですね。うそ言っちゃいかんでね。教師なんだからうそは言っちゃいけない。「何であんなこと先生言うの。」と言ったら、「だって、あの子たち一生懸命頑張ってあそこまでいったからほめてやらんといかんでしょ。」と言うんです。大間違いですね。そんなこと言うから、「ああ、そうか。」と、子どもは先生を信用しますからね。「僕らの豆腐はあのお豆腐屋さんにも負けないのか。」「あのお豆腐さんは30年苦労してようやくおいしいお豆腐ができるようになったなんて言ってたけれども、じゃあ、あのお豆腐屋は大したことねえな」と。これでは、大人を尊敬しませんよね。「豆腐なんか簡単」と言ってばかにしますよね。そんな子どもを育てたいんですか。そうじゃないでしょう。

だから、言ってやればいいですよ。「先生、立派な豆腐ができた。」「あ、お豆腐、どれ

どれ。これ？これお豆腐？これが。あのこの間見たようなお豆腐屋さんの立派な大きな四角い、角のきちんと出た豆腐は無理、あなたたちはできない。残念。あきらめる。」と、本当のところを言ってやればいい。すると「そんなことない、じゃあ、先生、次はああいう豆腐を目指してみる。」と来るもんです。僕なんか嫌味ですからね、なじみになってる子どもたちが「先生」と言って、本当に立派な豆腐作ってきてるんですよ。「ああ、立派な豆腐だね。ごめん、先生絹ごしはだめなんだ、木綿じゃないと。」とわざと言うんです。そうすると、「次は先生に木綿豆腐食べさせるぞ。」と言って、子どもはまた調べてきますよ。そういうふうハードルを課して、子どものやりがいを高めていくということが大事です。

大事なのは、子どもというのはそのくらいの力を持っているということを皆さんが信用してるかどうかですね。子どもを育てたいというんだから、育てる芽というか底力を持っていると僕ら信用して育てないといけないんですが、どうもつい不安になる人がいるらしい。かくして水準を引き下げる。ところが、それがかえって子どもの学びを弱くするんですね。すると、いよいよ子どもの力に自信が持てないので水準を下げる。悪循環です。やはり、ここは「本物」を目指すということが大事です。

豆腐づくりで言えば、豆腐屋の親父にも負けない豆腐をつくろう。単にお豆腐をつくろうじゃないんですよ、豆腐に負けない本物の豆腐をつくろうとかね、そういう活動のイメージにされるといいですね。そうすると、子どもたちは「まだまだだ弱いな」ということで、その豆腐屋にまた出かけて行きます。6時から起きて豆腐屋に見に行きますから、そういうとき子どもたちはすごいですよ。おじさんのところに弟子入りするぐらいの勢いですね。すると、見学に行ったときだけでは見えなかったいろいろなおじさんの工夫や苦労や気概ということが見えてくるんですね。いよいよおじさんと仲良くなって好きになって尊敬してね。

そんなことをしてるときに、例えばお母ちゃんについてスーパーに行くと、頭の中は豆腐だらけですから、豆腐のことばかりセンサーが働いてますから、豆腐コーナーでとまりますよね。「あれ、お母ちゃん、こっちの豆腐は270円もするけれども、こっちは48円だね。」「うん。」「何でこんなに違うの。何で。」「さあ。」と、お母さんはわからないよね。「何か違うんじゃないの。」と言って。「何でかな、お母さん。今日は280円のにしよう。」「何で、食べたら同じでしょう、こんなもの48円でいいわよ。」とお母さんの方が弱い。「いや、そんなこと言わないで今日は280円のを買ってくれ。」と子どもは粘ります。買ってきて食べてびっくりするね。「あ、お母さん、味が違う。」と「あ、本当だ。」と言ってお母さんもびっくりしてね。

これはもう材料や製法やいろいろなものが違いますよね。子どもは「何で違うのかな。」と、それで、食品表示を見るわけですね。食品表示というのを見ればいいということがわかって見る。でも、見てもわからないですよ。で、また調べていくんですよ。消泡剤って何かしらとか、何とかマグネシウムって何かしらといろいろ調べていくんですよ。そうしたら、やはり

値段の高いものは天然のにがりを使っているし、消泡剤なんか使っていないとかいろいろなことがわかってくる。

そういうことを調べてまたおやじのところに行くと、「そりゃそうだよ。」とおやじがね。「うちは国産の天然丸大豆だからね。」と、「何だ、それ。国産。」子どももまた、「おじさんち国産なの、外国の方がいいんじゃないの。」とか。「そんなことない。」とかいろいろ言われてね。「へえー。」と言って調べてみると大豆はほとんど海外からなんですよね。何で大豆みたいに日本的な食べ物が海外からこんな来るかなといろいろなことを考えるんですね。さらに調べていくと、ポストハーベスト農薬の問題とか遺伝子組換えの問題とかいろいろなことに出くわしていきますよね。

そういうことを気づかせたり考えさせたりしたいんでしょう。そうすると、本物ですよ。本物を目指す、その奥で本物の社会の現実に出会うんです。つまり、お豆腐屋のおやじが向かい合っている、あるいは豆腐屋のおやじを支えている大豆農家が向かい合っているこの厳しい社会現実や不条理な社会のありよう、それを僕らは乗り越えていいものにしていこうとしているわけですよ。そこに出会わせる。それを全部隠して子ども用に焼き直したのでは、子どもはままごととでしか学ばないんですよ。別に豆腐作るのは、子どもを豆腐屋にしようというわけじゃないですからね。そうじゃなくて、豆腐という対象との向かい合いを通して、その奥に見える食をめぐる目下の現状や、それを自分事として引き受け、たくましく乗り越えて社会や自分の生き方をよくしていこうということをしていきたいと思います。あるいはそのために学校で勉強している教科の勉強がどう生きるかというふうに思考させたいわけですよ。だから、食育をしっかりやると教科の学力も上がる可能性すらある。フィンランドみたいにね。あまり言われませんが、問題解決学習として食育や生活の教育をすると、教科の学力も結果的に上がるはずなんです。

だから、本物を目指すというのは大事です。その意味で言うと「子どもの上をいく」というんですけれども、僕ら。子どもの上を飛び越すような発想が大事だと。子どもは案外謙虚ですので、特に学校とか勉強の場では大したことはできないとたかをくくってますので、子どもだけに任せると、案外本物にいかないんですよ。

ある学校で小麦を栽培していて、収穫時期に近づいてきた時に、採れた小麦で何をつくらうかという話をしました。子どもはクッキーとかせいぜいうどんですね。それじゃ大したハードルがないですよ。それで、ハードルをもっと上げようと思って先生が、子どもが考えないようなことを言うんですね。「そうか、先生それもいいけれども、ピザとかスパゲティつくりたいな。」子どもは絶対考えませんからね。「先生、ピザは小麦なの。」「ピザは小麦じゃないの。」「そうか、小麦で作ってるな。ああ、ピザか。」とわくわくしてきますよね、子どもは。ピザできるなんて思ってないから。「先生、ピザだったらさ、上に乗せるソースはどうするの。」「トマトソースって何でできてるの。」「あ、トマトでできてる。じゃあ、先生、トマ

トをつくろうか。ピーマンも。」「先生、チーズはどうするの。」「チーズは何でできてるの。」「牛乳。」「じゃあ、牛も飼おうか。うちのクラスで、チーズのために。」「ええーっ。」「ヤギでもいいぞ。」と言って。すると子どもは「いや、先生それはちょっと無理だろう、この町中で。」それでも「そうか、惜しいな。」と、そのくらい先生が言えればいいですよ。先生、ハムやベーコンも乗せたらいい。」「ハムやベーコンは何でできてるの。」「豚肉だ。」「豚も飼おうか。」と先生から言ってね。そのくらい言えればいいんですよ。

結果的に豚は飼わないにしても、豚肉を買ってきてくんせいにするぐらいのことはやりましょう。おもしろいですよ。一斗缶でできますよね、スモークして。腸詰め作ったりして。そういうことを子ども時代からしっかりやったら、将来ミートホープみたいなことは起こりませんよね、本当に。そういうことを自分事としてやっていく。

そうやって子どもがわくわくするような発想って案外子どもだけでは出ません。大人がそういう夢をぶつける。だから、僕らも食をめぐる暮らしにもっと夢を持たなきゃいけない。もっとわくわくドキドキするような、もっと本物の食の文化というのを自分でつくって本格的な食を楽しんで、元気になって仲良くなってという世の中にしたいなということを僕らが日常思っなきゃやはりだめですよ。子どもは大人の背中で育ちますので、僕らの背中が夢に満ちてないと子どもは夢に満ちません。なかなかせちがらい世の中ですが、食べることぐらい夢を持ってないと。

服部先生がよく言われますが、1日3回食べることがあるので、そこに意識がいくと、年間に1,000回以上そのことを考えると。大事なことだなと思います。1年間に1,000回以上夢を持てるわけですから、大人がそうなるとその背中が子どもを変えていきます。

そうやって子どもがやりたいことを大人も夢を持ちながら一緒にわくわくしてやって問題解決して、自分たちの暮らしを創造していくという中で、どういう食行動が望ましいか、毎日の食とどう向かい合っていくか、さらに食をめぐる社会の情勢をどう再構築していくかということが考えられ、そのことができるたくましい子どもにもっていくんじゃないかと期待しております。

お感じのように、問題解決学習は子ども中心の教育の方法です。ところが、その子ども中心ということについてよく誤解があるんです。子ども中心の教育は迎合や放任ではありません。放っておくわけではない。ここのところ総合や生活科の批判で、子ども中心はいいけれども、好きなことをさせて放ったらかすんですか、それが教育ですかと言われる。そうではないんです。「遊びの善導」という言葉を大正時代によく使いました。遊びの善導、遊びを善に導く。つまり、子どもの遊び、子どもが本気でやりたがる活動がやはり教育の実は中核ではないかということです。でも、ただの遊びでは子どもはよく育ちません。それを大人が考える善なる方向、望ましい価値的な方向に導く手だてが必要です。子ども中心なのか大人中心なのかと、対立的にあれかこれかで考えるくせが教育の中でもよくありますが、それが間違いです。子ども

の思いや願い、暮らし、子どもの自発性ということを経験にしながら、それを大人が見て、善な方向に導いてやる、盛り立ててやる。そして、よい問題解決をさせていくことで彼ら自身が気づいていくということが教育の原理ではないかと思います。大正時代から総合学習や生活教育の中ではこの原理に基づいてやってきましたし、今でも重要な原理ではないか。食育もこの原理でやりたいなと思っているんですね。子ども中心の教育は放任や迎合ではありません。ちょっと具体例をお話ししましょうかね。

山の方の学校でしたが、山の中をいろいろ歩く中でいろいろなベリー類があるんですよ。それを採ってきていろいろな食べ物を作ってみようと言ってやってる中でジャムを作ってみたんですね。おもしろくて季節ごとのジャムを作って、季節感を感じたりしていくわけですが。でも、ジャムというのは割と簡単にできちゃいます、おいしいのが。割とあっと言う間に終わるんです。先生考えたんですね。ある日、ジャムを買ってきてね、4回目か5回目のジャムづくりの日に、「今日はね、先生来る途中でジャム買って来たんだけど、このジャム、もうみんなおいしいのができるようになったから食べ比べしてみない。」と。子どもは絶対考えつきません。でも、先生に言われたらやってみたくなる。先生の意図的・指導的なかかわりがあれば子どもたちもやってみたくなることです。こういうのが大事なんですね。言われてみたらやってみたくなるけれども、言われなかつたと思いつかない声掛け、かかわり、投げ掛けというのが大人の役目です。プログラムづくりのポイントでしょう。

そうすると今度は「よーし、負けないぞ。」と言って頑張るんですね。ここでね、先生が持ってきたジャムが負けることが大事です。一番粗悪なジャムを買ってきます。最近粗悪なものが減って教材的には困っています。農水省が頑張ってるんでしょうね。昔はもう真っ黄色にタオルが染まるオレンジジュースとかあったんですけども、最近なくなっちゃって困ってる。それ自体はもちろんいいことなんですけれども、教材という意味では困ってるわけです。でも、これはかなり昔の実践ですから本当に粗悪なジャムがあったんです、20年ぐらい前ですから。

子どもが食べ比べるんですね。それで「わぁ、先生、先生買ってきたジャムはおいしくない。甘ったるいしプルプルしてるし。」と言うんですね。水飴の含有量が多いし、着色料がいっぱい入ってるのがいいですね、教材としては。そうすると、「先生、こっちは色がどきつい。」とか言うんですね。いつもチューブのチョコとか食べてぐちゃぐちゃにやってるくせにと思うんですが、ジャムという一点については彼らプロですから、もはや、そういうことを批判的に言います。ここで先生が「そう、このジャム、給食とかによく出てるのと同じ会社のだけ。」と言うと「ええっ。これ食べてるの。」と。つまり、まだまだジャムづくりが日常の暮らしと別だったんですね。それを暮らしになぞらえるように投げ掛けた。こうして、子どもたちはどんなジャムが売られてるか見に行ったり調べたり、ジャム工場に行ってみたりいろいろするんです。その中で食品の安全性とか添加物の問題とかいろいろ調べてみるようになる。自分事になってきますね。

そういう意図的で指導的なかわり、子どもだけでは気がつかないけれども、教師が投げ掛け、声掛けをすれば子どもが動きだし、さらにその先で子どもの学び、問いが深まるようなことを意図的・指導的にやっていかないとだめです。そういう意味で実は教材研究というのが大事です。米と麦では、出会う問題、学ぶ事柄が違うんです。この栽培作物にはどんな特徴があるかということをやはり分析しなきゃいけない。

僕らそういうの大事だなと思って、ちょっと宣伝になります、今日資料入れてもらったんです。学研さんで「学びを深める食育ハンドブック」という本を友達と作ったんですが、その中でも教材研究の原理、今日お話ししてきたようなそういうのをちょっとやってみたら、1つ1つやはり食品によって随分違うんですよ、指導のポイントが。そういうことが見えてきて。そういう丁寧な指導にかかわるいろいろなノウハウを僕ら集積していかないといけないなと思っております。

単なる体験や活動ではなくて、あるいは一方的な行動のしつけでもなくて、子どもが自分事として食の問題をとらえ、よりよい解決を求めて納得がいくまで探究する。食育をそういう学びにしていきたい。すると子どもたちの生き方まで変わっていき、将来社会に働きかけて、社会をもよりよい方向にもっていこうとするという市民になっていくんじゃないか。

食育というのは食をめぐる教育ですけども、大きくは生活の教育だし、市民としての生き方、あり方の教育だろうと思っています。生活の教育自体は大正時代から草の根でなされてきましたが、生活の教育の中で、食をめぐる領域が一番やりやすいし、一番効果が出ます。子どもたちの生活の中で一番自分たちにとって切実で、毎日繰り返され、見えやすいものが食だからです。だから食育をやるということは、市民教育や生活教育ということ強く推し進めていくことにもなっていく。食育は何も食だけの問題ではないです。子どもたちの生き方を変え、将来の市民社会を変えていく、その大きな契機になるんじゃないかと期待をしています。

このところ社会が厳しくなってあまり居心地のいい世の中じゃないでしょう。みんなが夢や希望を失って、若い子たちも元気がなくなっています。そういうのを立て直すのに市民としての生き方、あり方をしっかり足元から考え、たくましく生きていける子にしていきたいし、その子たちとともに僕ら大人もしっかりしていきたいわけですけども、その一番中核になる領域として食育ということがあるんじゃないか。食育はすべての教育の基本だということは最近言われていることではなくて、実はもう大正期や昭和の初期にもそういうことを言った人がたくさんいるんですね。それは今お話ししたような意味です。食だけではない。市民の教育、生活の教育ということが大事だ。そして、その中核が食じゃないかという洞察だったと思います。

この後、お二人のご実践をまた伺いながら深めていきたいと思っております。

ありがとうございました。（拍手）

司会 ありがとうございました。

子どもの学びを深める深め方が大変よくわかりました。

2. 事例報告

司会 続きまして、事例報告に入らせていただきます。

初めに、埼玉県入間市で地元の小学校で1年生から6年生までたくさんの種類の野菜などを農業体験させていらっしゃる、有限会社加藤ファーム代表の加藤様からご報告いただきます。

それでは、加藤様、よろしくお願いいたします。

加藤氏 皆さん、こんにちは。加藤といいます。ちょっと風邪声なものでお聞き苦しいかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

本業は農家でして毎日畑に出ているいろいろな仕事をしているわけですがけれども、話が今の奈須先生、私のやってること、最後の豆腐のことですとか大豆のことですとか、先生去年見に来てたんじゃないかなと話を聞いてました。ありがとうございました。

入間市はお茶の盛んなところなんですね。お茶畑がたしか400ヘクタールぐらいある、茶園ばかりのところなんですがけれども。そういったところで大豆とそば、それから小麦、それからコアラのえさのユーカリの栽培をしています。これでいきますと、20ヘクタールになっちゃいますけれども、小麦と大豆、大豆とそばは反対側でつくりますので、実際には13ヘクタール前後の経営体です。

一番上に書いてある大豆ですね。これはもう10ヘクタールほど栽培しているんですがけれども、13トンから14トンぐらいの大豆がとれます。そのうちの2トンちょっと自分のところで味噌に加工しまして、8トンぐらい味噌ができるんですがけれども、あと残りは豆腐屋さんに使っていただいています。

この畑、13ヘクタールをすべて無農薬・無化学肥料の栽培を行っています。

(スライド) 今日はこの食育というお話なんですけれども、私はこのことに取り組み始めたというか何となく入ってきちゃったというのは、平成3年だったと思うんですがけれども。PTAの役員がきまして、PTAの副会長をとりあえず平成3年にやって、4年には会長をやれというようなことできちゃったんですね。平成3年にこのぐらいのよりちょっと狭いぐらいの会場に役員の交代に行きまして、PTAの役員というのは奥さんたちで占められていると知らなかったんですね。そんな意識なくて行きまして。わっという感じでそこでもうびっくりしちゃったんですね。それはびっくりしたという感覚はずっと後まであったんですがけれども。

役員をしているいろいろなお母さんたちと話したり子どもたちと話したりする機会が多くなりました。あるとき、酪農家のお母さんが言った言葉ですが、人参を作っているんだけれども、おばあちゃんが人参を畑から採ってくるらしいんですね、しかし、それは子どもには食べさせないと。子どもに何を食べさせるかという八百屋さんから買ってきてきれいな人参を食べさせるんだと。というのは、酪農家ですから牛のウンチが、糞がいっぱい出ますからそれをたい肥

として畑に施してあるわけですね。そこで人参よくできますので人参栽培しておばあちゃんが収穫してくるわけですよ。そうしたら、それを見たお嫁さん、お母さんが、こんな汚い人参は食べさせられないと、うちの子どもには食べさせられないという話を聞きまして、ええっ、これは何ということだということまでびっくりしまして。

その後、これはさっきのお話のお母さんたちのいっぱい占められているPTA活動はですね。そこでお父さんたちも何とか呼び出せる機会をつくらなきゃいけないなということで、お父さんたちを呼び出させる機会をねらっていました。学校に提案したんですね、20アールほど、2反歩というんですけれども、畑が学校から子どもの足で5分ぐらいのところにありましたので、そこに農家に話しまして、うちの畑じゃなかったんですけれども、近所の農家、その持ち主がその畑を放置、要するに荒地になっていたんですね、草だらけになっていたもので、これを学校で使いたいんだけどもということで、校長にだけちょっと一言言いました。それで話ができまして、もう先生たちに無理やり畑をやってもらうようなことを押しつけちゃいました、一番最初は、結構先生嫌がっていましたね。でも、平成3年のことですから。当時食育なんていう言葉もなかったです。この今のパワーポイントの一番最初に「狭山農業小学校」という題名、私も勝手に書いたんですけれども。その当時あそこの学校は農業小学校だなんてお母さんたちのもっばらの話になっていました。

それから、畑がいっぱいできたもので、とても20アールありますと農家でやっても手で鍬と草刈りでやったんじゃもう追いつかないんですね、夏の草の時期なんかは。たまたま、バザーというのをよくやりますね。そこで工夫しまして、いつも30万円ぐらいの売上があるんですけれども、皆さん自分で相対で値段を決めてその場でやってくださいということで値段を決めないでバザーやったんですね。そうしたら何と売上が倍になっちゃったんですよ。60万円売り上げまして、普通30万だったのが60万売り上げちゃったんですね。で、余裕ができて、耕運機を仕入れてもらったり、それから飼育小屋が古くなってるから何とかできないかなというのがありまして飼育小屋を作ってみました。

それから、飼育小屋が予定より大きなのをつくっちゃったんですね。子どもにアイデアを募集しまして、賞をあげるからアイデアを出してよということで子どもに聞いてみたわけです。募集かけましたら、10点か15点ぐらいだったと思いますけれども集まってきまして、その中で部分的なアイデアをいろいろ総合してできたのが後の写真に出てきますけれども、ぴょんぴょんランドをウサギが増えて困っているもんで、ウサギ小屋として作ったんです。

作って見たら、余りにも大きすぎてヤギを入れることになりました。というのは、私はユーカリをさっき栽培していると言いましたけれども、動物園のコアラのユーカリの栽培をしているんですね。動物園にしょっちゅう行っているもんで、ヤギはいないかなということで相談しましたところ、いるということで、割とひょうきんなヤギをつかみまして。ヤギにもいろいろ性格があって、子どもの後をよくついて歩くんですね。それで、ヤギが人気者になっちゃいま

して、10年ほど生きていたんですけれども、いろいろな学校行事にもついて来ちゃうんですよ。そこに参加するもんで、子どもの間ではヤギなしではいけないと。ナツという名前でしたけれども、本当に10年ぐらいの間ヤギに携わってきました。

たしか生活科の授業が平成3年から、実験校として導入され、その生活科の授業として1年生、2年生で小麦をつくろうと。最初はそれだったんですけれども、1年やってみないうちに3年生、4年生、5年生、6年生まで含めた中で畑が広いからやっちゃおうよということになりまして全体的な広がりになりました。

こういった中で先ほど話しましたおやじの会、おやじの集まりということでおやじの会という名前でおやじさんたち40人ほど最初集まったんですけれども、今現在提携しているのは10人ほどですけれども、40人ほど集まりまして、ヤギ小屋を作ったりした。それからこれは脱穀ですけれども、緑森の脱穀の風景ですね。これも緑森の、炭焼き場です。これも自分たちで作ったんですけれども。それからこれはどんど焼きといいまして、皆さんのところでやっているとところもあると思うんですけれども、学校ではこのどんど焼きともう1つふるさと祭りというのをやりまして、それは秋、収穫祭ということ考えていましたら、学校の方では収穫祭というのは何かちょっと宗教色が強い表現だよというように言っておりまして、じゃあふるさと祭りという名前にしようかということで。昔の遊びの体験やら、一般によくやられていますよね、あの辺をやりまして。

そのときにも畑で芋だとかいろいろなものを栽培していましたから、そのときにちょうど芋のできる時期だったんですね、サトイモ。それをリヤカーで2台くらいありますね、子どもたち5年生、6年生が掘り取りしまして、そのふるさと祭りに大漁旗を立てて持ってきまして、その場で調理して大きな鍋で子どもたちに食べさせました。

(スライド)これが畑でやられているサツマイモ、キュウリというようないろいろなものがつくられていますけれども、かなり見た目でもいろいろな、こんなに作っていたかななんて僕も思えるぐらいなんですけれども、でも畑におさまっていると何となく絵になっているんですね。

(スライド)それで、これは18年度の取組です。おやじの会も先ほど言いましたけれども、年齢がもうおじいちゃんの会になっているんです。子どもたちともちょっと距離ができたり、あるいは学校の方とも少し距離ができてきています。実際のところうちでは私と女房と息子と3人で学校の畑につき合っています。

これは18年度の学校農園で田植えをしているところですね。それからこれは大豆です。田植えはブロックで仕切られた花壇があったんですけれども、その土を子どもたちが全部出しまして、そこにビニールを敷きまして、田んぼに近いような土を役所に持ってきてもらって入れたんですね。結構見事な田んぼにはなっています。面積的には20平米か30平米ぐらいですね。これは学校の裏の大豆畑ですね。これが20平米か30平米のブロックの花壇です。

この畑は以前、20 アールといいましたけれども、そこはいろいろな社会変化の状況で今はそこ使ってなくて、学校のすぐ裏に畑があります。このすぐ前側が学校です。そこで子どもが、200 平米、150 平米ぐらいだったと思うんですけども大豆を栽培しまして、40 キロぐらいの大豆が採れたんです。農家が作ってもそんなに採れないというよう状況でよく採れました。

もうこれは去年の最初の取組としてお味噌をつくろうと。私のところは先ほど申し上げましたように、お味噌を作って販売しているもので、それをやりたいと。子どもたちいろいろそれまでに調べたんですね。さっきの先生の話の発酵の話、お米の話、大豆の話、それから販売するにはどうしたらできるか、保健所の許可がどうなのかというようなことまで調べまして、できました。ことしの2月に作りまして。

これは大豆を煮てるところです。一番左は麹を作っているところです。見事にできました。まだ結果は秋にならないとわからないんですけども、私のうちよりおいしい味噌を作っていました。子どもたちもその間によく電話してきます。もう忙しいときに、何でこんなときに電話してくるのというときもあるんですけども、でも丁寧にお答えするようにしています。

(スライド) ちょっと急ぎます。左側は公民館事業での里山の体験教室ですね。右側は中学生の水田チャレンジというのを埼玉県内一般的にやられているものですが、その体験ですね。

(スライド) スリーデイですから3日間来るんですけども、もう2日目から飽きるんですね。で、これが11月の末ごろ来るんですけども、この学校は。飽きたところに持ち出すのはサトイモを保存するための種芋を保存するための穴掘りですね。飽きたときにこれを持ち出すともう100%の子どもははまっちゃいます。もういいよと言っても掘るんです。今年なんか2つ掘ろうと思っていたら3つ掘っちゃいまして、そんなことで子どもは何であんなにはまるのかちょっと私もよくわからないですね。

(スライド) これは緑森の田んぼ。緑森ってさっき言いましたけれども、狭山丘陵の自然公園のトトロの森と言われるところに田んぼがある体験の田んぼです。左側は大豆の芽を出すところなんですけれども、大豆をまいた後大雨が降ったりすると土も固まってしまいますね。それを持ち上げて芽が出てくる大豆の様子です。前に戻りますけれども、子どもたちこういうのを見てるんです。たまたま天気がよくてよく出ちゃったときはこの写真を持って来て見せるんですけども、そんなことをやっています。

(スライド) これは狭山丘陵でのやはり田んぼづくり、何ガエルといひますかね、人が見ると気持ち悪いような感じでも子どもは平気でやっています。

(スライド) もう時間がなくて、すみません。農業の、私が子どもたちにどうしても言いたいことは、本物の味を知ってもらいたいですね。私は食育というふうな形で教育的効果がどうかこうだということは余り考えないし、言いたくもないんですけども。本物の、農家として、農家の農業が感じた食育として本物の、大豆にしてもキュウリにしてもカボチャにしてもいる

いろいろなものにしても、無農薬でできた本物の味。今の本物、例えばコマツナにしてもいろいろなものがありますけれども、あれは本物ですけれども、だけれども本物じゃないんですね。改良されているんですよ。今本物として江戸野菜とかというふうに言われてますけれども、改良されない本物の味が欲しいです。ですから、大豆も今改良されていますけど、今私のところではローカルな、例えば秩父にある品種ですとかそういったものを主に使ってます。改良されたものは虫に弱いんです。農薬かけないとできなくなっちゃいます。昔からあるやつは農薬もいらないうすし、ゆっくりと収穫もできます。そういった意味で本物の味を大切にしたい。

以上です。（拍手）

司会 ありがとうございます。

加藤さんのような農家が近所にいらっしゃったらいいなと思われる方も多かったと思います。次に、静岡県焼津市で公民館の市民活動グループが地域ぐるみで農業体験を実施していらっしゃいますやきつべの里フォーラムの事務局長の鶴田様からご報告いただきます。

それでは、鶴田様、よろしくお願いいたします。

鶴田氏 こんにちは。私、静岡県焼津市から来た鶴田です。焼津市というと皆さん知ってると思いますが、カツオやマグロの水揚げで有名な場所であり、山あり川あり海ありというところです。私たちが活動している東益津地域は、標高 501 メートルの高草山という低い山があり、そのふもとに位置します。

また、東益津地域には、徳川家康が鷹狩りに来て休むときに旗をかけたといわれる旗掛け石など、古い歴史・文化が未だ残っているところです。

地域性としては自治会の方々が一生懸命やっている地域ということが住んでいてよくわかります。また、この地域には東益津公民館というのがあります。

（スライド）東益津公民館というのは、焼津市にある 8 公民館の一つです。そこに様々な団体がたくさんいろいろありましたもので、これをまとめて「やきつべの里フォーラム」という団体を組みました。現在では、22 団体あります。事務局は東益津公民館に置いているので、公民館に行けばフォーラムの事業というのがわかります。

この公民館と焼津市にある焼津公民館、大村公民館とで三公民館合同地域交流講座というのを実施しており、フォーラムも参加しています。この講座の一つである「MYライス作り」と呼ばれる、お米づくりです。他にも公民館の特徴ある場所で何か作るとか、例えば焼津公民館の場所は焼津港に近いものですからナルトを作るとか、そういった各公民館の持ち味を生かした交流をやっていきます。

企業の方はサッポロビールという企業があります。ここには社会貢献とか人材提供と書いてありますが、福利厚生との関係をこちらでお手伝いしたり、ビール会社の従業員がフォーラムに参加してもらっています。

学校関係の方は、参加される方は小学生とか幼稚園児です。中学生になりますとボランティ

アで手伝ってくれたりします。また、東益津小学校の場合だと総合学習的な学習の時間でお米づくりをしています。

この他、行政との関連については、焼津市の農政課で農業体験をやるときには、こちらでも参加したりお手伝いに全部行きます。ですから、うちの方のやきつべの里フォーラムについて行政区では承認というか認めてもらっています。ですから、うちの方もいろいろなことをやるのに割合楽にいつてます。

(スライド)これは三公民館の交流事業の1つ「MYライスづくり」です。自分で自分のお米を作ってます。平成17年から始まって、今年度は130名です。親子で参加してもらっています。この中には途中から弘香幼稚園の親子の方も参加しています。

(スライド)これが昨年度のMYライスづくりの活動状況です。まず、籾蒔きなんですけど、うちの場合、籾蒔きやった後、室へ入れます。蒔きというのを皆さんご存じですか。それに水をいっぱい吸わせて、農家の人ならわかると思うのですが、苗箱を積み重ねた棚の周りを囲います。これを高さ1メートル50ぐらいあります。それから、今度は光を入れないように黒いビニールでこれをまた囲みます。そうして芽を出させるんですけど、大体5日ぐらいで出てきます。これを出すと黄色になっています。これを見た子どもはびっくりするんです。真っ黄色になっていますからこれは5年生の授業ではまだやってないようなんですが、光合成ということです。これから光が入ると緑色になってくるんです。

それと、このときにわかるのが、この低いところと高いところ、1メートル50だけでも温度差というのがすごくあるということです。上の方は熱いんですよ。だから伸び率が早いんです。下の方は温度が低いからこのようにちょっと出が悪いんです。だから、苗が短くなってしまった子や、下に置いてくれた子は心配します。「おじさん戻るかしら」、「しっかり伸びてくれるかな」と。子どもというのは疑問にすぐ客観的にとらえてくれます。だから、こういうときになぜかということ子どもに教えてやらないと、なかなかわかってもらえないんじゃないかなと思います。

これは田植えを植えるころには一緒の高さになります。また、小学校では古代米の方を使っています。

(スライド)MYライスも同じような方法でやっております。MYライスの場合は「あいちのかおり」を作っています。私達は何をするときにも、例えば、田植えする前でも、籾蒔きするときでも、まず説明をします。どういうものかということをはっきり説明してあげることが大事。それから実践に入って作る。

7月の草取りですが、これは参加者の皆さんにやってもらいます。それとかジャンボタニシ、うちは駆除のための薬使いませんし、今年度は去年の冬の気温が暖かったせいか、ものすごいジャンボタニシが発生しました。5年生の田んぼは3回ジャンボタニシ取り、補植を2度しました。資料は去年のもので、この年のMYライスの田んぼにはジャンボタニシは余り出なかつ

たんです。

それからこの草取りが終わると高草山のふもとの自然の水が出るところへ行って流しそうめんをやります。この流しそうめんがあるということで参加者は若干増えますね。親が多いんです。やはり食べるというね、みんなそうだろうと思うけど。

8月には、案山子作りをします。これは自分達で考えてもらって作ります。自分の田んぼの方へ行ってみんなで立ててもらいます。昔と違っていろいろな衣装、着物、洋服等がありますので、かなり変わったスタイルの案山子もできます。

10月は稲刈りです。鎌を使うのですが、皆さん道具を使うのが下手というところも怒られるかもしれませんが、はっきり言って物を使うのがあまり上手ではありません。今のお母さんお父さん、だいたいがそうだと思います。頭で考えて実際には、学校でもそうじゃないかなと思いますが、“危険”、これが一番にきます。だから、持たせない。一番悪いことです。使っちゃ悪いとか危ないとかでなく、これを使うにはどうしたらいいかという、経験をさせるのが一番です。これ使っちゃ悪いとか危ないと言ったらずっと使いません。その辺気をつけてやってください。

(スライド) 11月は餅つきです。MYライスの作付けは「あいちのかおり」で普通の玄米ですけども、ここでは、5年生が作っている古代米の緑米、つまりもち米を使っています。古代米を餅にして食べてもらうのとは別に、あいちのかおりはかまどで炊いて食べます。それと、1月には米粉の料理教室をやります。やる前に1時間食事バランスガイドの説明を栄養士さんにやってもらいます。

(スライド) 次は小学校の総合的な取組です。ここへ書いてあるとおりです。前年度と変わっているのは枝豆とサトウキビをやるようになりました。

(スライド) これは先ほど「MYライスづくり」の5月のところで説明しましたが、子どもさんというのはこういうのをやっているるとすごい目がキラキラ光っています。はっきり言って、いろいろやるときには、すごく前向きなんですよ。教室にいるとしょぼんとしてるんですけども、外へ出るとすごい生き生きしています。それと、話をすればざっくばらんに子どもさんが声をかける。だから、大人も楽に普通の話をしたらいいんです。

MYライスの方でお米の取組のたいたいはお話したので、こちらはポイントだけお話しします。この10月の稲刈りは天日干しをします。ハンデと呼んでいます。こちらの方では何と云うかちょっとわかりませんが、地方によって違った呼び名があると思います。このときもこのハンデについて説明をします。これ物理的にうまく考えられています。3本の足、次が2本なんです。この2本の次は3本です。交互にやっていきます。これうまく重量バランス考えているんです。それと風雨とか横の風、縦の風など、全部考えてます。

それとか、この刈った稲を束にして縛るとき、機械だとひもで機械で縛ったのが出てきます。しかし、うちの方は、残ったわらで縛ります。

前列の方、わかりますか、使ったことありますか、わらでね、ぐるぐるして、はさめばしっかり取れずにハンデにかけられるわけです。

- - 私はまねごとやっています、

鶴田氏 そうですか。昔の人は上手なんです。くるくるっとやると素早い。やはり考えているんですよね。ちょうちょ結びやらないもんね。(笑) そうのんびりしてない。うまく考えています。理屈に合っているわけです。そういうところも実践でやっていかないと、なぜかということ、ものの利用、工夫、知恵、そういうものがわかってもらえないのではと思います。

(スライド) これは餅つきですね。変わっているといえば、12月にしめ飾りをわらで作ってもらいます。この資料にはしっかりした写真が載ってないんですけども、50センチぐらいの長くきれいな、家の門や玄関などに飾るしめ飾りができます。市販で買うと2,000円、3,000円以上すると思います。子どもさんというのはこういうのを作るといことが好きで、早く覚えてくれます。器用です。

1月はやはりクッキングです。小学生の場合はマドレーヌをつくります。やはり作る前に食事バランスガイドを1時間やります。その他、小学生の場合は2月に父兄参観のときにお米について体験したことを劇にして発表します。

時間がきたようですので終わらせてもらいます。(拍手)

司会 ありがとうございます。

2事例目は学校とか地域、企業、行政、教育委員会、こういった関係者がすべてそろって活動されているというところでした。

それでは、ご講演いただいた奈須先生と事例報告者の3人のパネルディスカッションを行っていただきたいと思います。

その前にちょっと時間いただいて会場をつくりますので、お待ちいただきたいと思います。

その間に農林水産省の教育ファームの施策をPRをさせていただきます。農林水産省では全国の教育ファームの優良事例集、「GO!GO!教育ファーム」というものを作成いたしました。この事例集は今回のお二方の事例もこの中に含まれております。この事例集は販売していませんが、農林水産省のホームページの「なぜ?なに?食育!」というサイトがございますので、その中に内容が入っておりますので、ご覧いただきたいと思います。

そのほか、本日の奈須先生も委員になっていらっしゃる教育ファーム推進研究会が5月から開かれていまして、ちょうど今日の午後、2回目がございますけれども、第1回目の議事概要などもホームページのなぜ?なに?食育!のサイトに入っておりますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

また、このGO!GO!教育ファームの中の加藤様のお電話番号がちょっと違っておりますので、お電話かける際には事務局の方にお確かめいただきたいと思います。

4 . パネルディスカッション

司会 それでは、準備ができたと思いますので、パネルディスカッションの方をお願いしたいと思います。

それでは、奈須教授、進行をよろしく願いいたします。

奈須教授 では、残りの時間、20分足らずですが、今の事例も含めて皆さんと深めていきたいと思います。

まず、ちょっと短い時間で無理にお願いしたもんだから、最後までいききってない部分があるので、その補足、事例の意味のまとめのようなことを少ししていただいきましょう。ちょうど轟田さんお話しが中途になった感じなので、その続きで、お取組についてまとめということもないんだけど、ご提案やさらに注文のようなことも出していただいで。

轟田氏 私どもの方はテーマとして“心・コミュニケーション・未来”「豊かな自然」「豊かな心」。今現在経済的にも企業が国内から海外へみんな出て、今こちらにいる方も普段忙しいと思います。朝早くから夜遅くまで仕事で疲れ切ってると思います。そういう中で残されるのは子どもです。何ととっても子どもです。お父さんお母さんも疲れています。何ととっても日本の機嫌は空洞化したといいますが、はっきり言って心の空洞化だと思います。家族と接する時間がないし、ゆっくりすることないものですから、食事についても、お母さん、お父さん、作る人に申しわけないのですが、なかなか食事バランスガイドのような食事のつくり方というのはできないんじゃないかなと思います。

私たちが言いたかったのは、子どもというのはまだ未完成であります。可能性がいっぱい詰まっています。この無限の可能性を広げるお手伝いができたらいいなと私たちは思っています。子どもを大事にしてください、お母さん、よろしく願いします。

奈須教授 加藤さん。

加藤氏 いいです。

奈須教授 お二人の今日ご実践を伺いながら、今も轟田さんが言いましたけれども、子どもはすごくいい存在で目を輝かせているとか、加藤さんの実践でいうと穴掘ですね。子どもが変わった変わったといいますがけれども、子どもは本当に変わってるんだろうか、奥の方では変わってないような印象をお二人の実践から私感じてうれしく思っているんですけども。

子どもは変わっている面もありますが、それは表層に出ている面で、奥の方といいますか、まだまだ美しい部分、人とつながろうとか、力を出していこうとか、損得じゃないぞというふうな何かいいところがいっぱい残ってるんだなと、それを農業体験が引き出してきて、本来の子どもらのあり方を自分らも気づいているような。

おもしろいのは、それにほだされて大人も一緒に気づかされていくとありましたよね。それを通して何かが変わっていく。食育という、僕ら大人がまだできてない子どもの悪い部分を

正してよくしていくみたいな感じを何となく思いがちだけれども、どうもそうじゃないような感じがすごくして。むしろ表面的に子どもが変わって残念なように見えているのは、そういうふう生きざるを得ない環境に僕ら大人が社会をしてきたと。食だけじゃなくてね、今お話にありましたけれども。何かそのあたりのサイクルを僕らも含めて取り戻せる機会が農業体験、そこでの子どもの育ち、それとつき合っていく大人というところにある。あるいはそれを通して地域社会を再構成する、これは加藤さんのご実践の中にもありましたけれども。

何かそういう意味で農業体験を通して子どもが変わる、社会が変わる、その中にお二人の実践が、私の話につなげさせてもらおうと、質的にぐっとよくなっていくポイントのようなものがあるんじゃないかと思いますけれども。何かその辺でお話しただけであればと思います。子どもってどういうものだろう、あるいは子どもを変えていくポイントってこんなところじゃないかというあたりで、どうでしょう。

鶴田氏 1つの例なんです、例えば野菜ですね、家では食べない野菜を自分で作って、自分の手で採るとこれが食べられるようになる。好き嫌いが多い子がそういう体験の中で何でも食べられる。その辺がはっきりしております。

奈須教授 加藤さん、そういうことあります。

加藤氏 はい、同じようなことでやはり豆腐なんかをつくりますと、おいしい豆でつくりますので味が全然違うんですね。子どもたちちょっとだけ食べて、あとはもうお母さんに持って帰るんですね。全部食べちゃう子はいないですね。3分の1ぐらい食べて、3分の2ぐらいはうちに持って帰って、だれに食べさせるのかということだとお母さん。まずお母さんと言いますね。

奈須教授 そういう、僕らうれしくなるような優しさというのは子どもの奥にはあるんですよ。それが日常だと出てこないんだけど、そういう農業体験をして本物に出会ったり自然とかかわりあって生きているという実感の中で何かそういう優しさも出てくるような気がしますね。何かそういうこといっぱいあります。

加藤氏 先ほどの例は狭山小といううちの近くの学校の例だったんですけど、市内に13校ほど小学校があるんですけど、その中の幾つか行ったんです。新久小というところに行きまして、あれはたしか稲の脱穀だったかな、そのポイントだけで行ったんですけど。授業始める前に先生がいたずらっ子が3人いるから気をつけてくださいと警告されておりました。始まったんですね、5年生の授業が始まって、いたずらっ子がちょっと心配だと思っていたのですが、そうしたら、3人すごく協力してくれる子がいて、全く感謝していたんですよ、そこに授業が終って、「先生、いたずらっ子てあの3人ですか。」と聞いたら「そうだ。」と言うんです。やはりね、違うですね、子どもたち。その辺が学校の評価あるいは一般社会の評価というのと違うんじゃないかなという気がするんですけども。

奈須教授 すごい今大事なことですね。ある視点から見たら悪ガキに見えてしまうんだけれ

ども、それは僕らの視点の方が違うんじゃないかという。逆に言えばあれですよ、加藤さんのところにその子たちは来て生きる場を見つけたんでしょ。そういうことですよ。

覇田氏 うちの方もそれあります。だけれども、ここにいるお父さんお母さん、万能じゃないと思う。はっきり言って。それは子どもだって同じ。全部はできないと思う。悪いのがいて、いいのもいる。悪い人もいなけりゃいい人の評価はないと思う。

だからね、目の角度によって違うんですよ。だから、そこだけは目をつぶってやって、いいところをちゃんと受け止めてやらないと。子どもがかわいそうだよ。悪いところばかり攻撃していくかと思うと。だから、家に帰ってお父さんの悪いところばかり目につくというふうなことになったりする。そうじゃないのかな。

奈須教授 そういうことですね。だから、非常に強い価値で何が悪いと決められていると生きにくくなって、でもさっき覇田さんおっしゃったけれども、その子たちを悪ガキだと言ってる先生の背後にあるのが、仕事をして疲れて、みんなが孤立して幸せになれなくて、食行動にも問題が出るような社会でしょう、残念ながら。むしろ悪ガキだと言われている子どもたちが加藤さんの農園に来て一番よく働いて一番自然と深くかかわって生きられるということですよ。むしろ僕らその方に子どもも含めて変わっていくべきじゃないかと。そのきっかけに食育や農業体験がなるんじゃないかと。

だから、農業体験は人間のすごい深い本来的なことを引き出してくれる、その子どもの姿にお母ちゃんたちもだんだんほだされて変わっていける場のような気がしましたけれども。何かそういうことを意識もしておられるし、また加藤さんや覇田さんもそのことをお感じになることがきっとあるんじゃないかなと思うんですが。

加藤氏 一番最初にお母さんたちのPTAの集まりが自分でびっくりしたんですけれども。その関連で、親、子どもに影響があるのはやはりお母さんですから、そこも変わるべきかなというのはありまして。それで、さっきの話のおやじの会は無理やりお父さんたちも集めてみたんです。そうしたら、少しは変わってきた、雰囲気が変わってきた。要するに、男どもが学校に来て作業したり労働したもので見方が変わってきたんです。

学校そのものの評価も変わってきたみたいです。私がPTAを引き受けるときの学校の評価というのは割と気楽な学校だから子育て学校なんて、こういう言い方はどうかかわからないですけども、もう時効ですよ、10何年前ですから。子育て学校なんて言われてました。でも、私たちがそういうことをやった後は狭山小学校に行きたいという人気の何番目かに入ってるという評価も聞くことができました。そんなふうに変わってると思います。

覇田氏 これは、ぼちぼちやるしかないなと私達は思っています。無理にやってもね、早くやったり急いでやっても人間の心とかそういった自然ということは通用してくれません。まずぼちぼちできることからやるしかないなと思ってます。

子どもはちゃんと見ててくれます。「自分でやれるものは自分でやる」というようなことを

判断をして進んでくれます。例えば苗作りは、毎日水が必要なんです。朝昼晩、お天気によって、毎日温度が違いますから。「水をかけるのにどうする？」と生徒と話しをして、生徒で決めてもらいます。そうすれば、自分で決めれば自分でやるようになるんです。大人が余り手を出さないところと、手を出してフォローするところを区別すれば、子どもというのは一生懸命やってくれます。

田んぼに入ればお米だけじゃありません、自然の生き物とかそういうものが目につきます。先ほどのジャンボタニシですが、逆の発想で、ジャンボタニシは何を食べるんだと。今水槽で飼わせています。ジャガイモと酒粕を入れて、どっちを早く食べるかとか、たくさん食べるとか。田んぼへ行ってからいろいろなものを見れば、教室へ来てそういうことも勉強できるんじゃないかと思います。

だから、自然というのはいっぱい教育の材料が転がってるし、詰まってると思います。また、日本食、和食ですね。国内の農産物を食べてもらいたいと思っています。

こちらの局の方には悪いかもしれませんが、ハウス栽培と露地栽培をはっきりしてもらいたい。太陽が直接当たった方がおいしいんです、ハウス、薄いビニール、あれ一応は通しますよ。味、香り、あまりありません、きれいだけ。こんなこと言うと農家の人に怒られるかもしれませんが。

加藤氏 私も同感で、同じような考えで農業やっているんですけども。先ほど覇田さんから苗に水をやるという話がありましたのでちょっと思い出しまして。近くの、学校名は大妻女子大というのがありまして、すぐ近くなんですね、歩いて5分ぐらいのところにあるんですけども。そこに農業体験をしたいということで3年ほど前から行って話をしたり、ナスやキュウリ、トマト、そういったものを栽培するんですけども。

そのときに1つこれだけは守ってというのがあるんですね。多分この中でも畑やってる人もいると思うんですけども、苗を植えたら1回だけ水をやってくださいと、あとは絶対やらないでくださいと。もう土はそれなりに私の方で責任持ってたい肥を入れたりやってあるのでまず枯れることはないし、ひどくなることはないんですね。子どもたちそれを聞かない子どもがいます、子どもというかもう大人ですね、女子大生ですから。水をやる子もいるんですね。始めちゃったらもうそれはそれで先生と相談して見ていようよと、どんな違いがあるか。水を一生懸命やっている子もいますね。でも、水をやる必要ないよと、根っこがちゃんと張るように土が作ってあるから、ちゃんと実をつけるし花も咲くから大丈夫だよというそういう、要するに環境を作ってやるのが大事なんですね。

あとは、持ってる生徒の答えが最大限いいものを持ってますから、ちゃんと生きる力を持ってますから、子どもも同じだと思うんです。

奈須教授 今のお話ね、その水をこうするんだという具体的な行動の理屈があるじゃないですか、なぜそうするかというのはすごく大きな生物なりあるいは自然と共生してやるなり、農

業のそういう理屈があって。先ほどの覇田さんの話もその理屈はすごく応用が効いて、その場面だけじゃなくてその子がいろいろなものに今度かかわって問題解決して生きていくのに役立つんだと。

そういう農業というか農作業というのは、加藤さんさっきおっしゃったけれども、余り考えずにぱっとやることがすごくもう何百年、何千年の知恵として僕らの動きとか判断という形で出て、その奥には自然とともにかかわって生きていくということに関するいろいろな経験を含めた知恵がありますよね。そういうことを上手にされていく。だから、応用が効くということだと思っただけでも。

覇田さんのお話の中でおもしろかったのは、それをきちんと説明するということですね。ただこうしろと言うんじゃなくて、説明する。それを説明して子どもが意味とか原理としてわかると応用が効くという話がありましたけれども。すごくそういうこと大事ですし、かかわってやっておられると思うんだけど。

何か知恵を出すということですね、僕ら。その体験を通して知恵を出す。そのときに体験を少し僕ら言葉をそしゃくして伝えていると思うんです、覇田さんの中にすごくあったんですけども。それがないと子どもはただようわからんけれどもやっておけばいいんだと。

水をやるというのは、僕も今反省してるんだけど、生活科とか小学校ですずっと花を育てるでしょう。あれでアサガオやるとアサガオはとにかく毎日水をやるというのがね、多分それが残ってるんですよ。そのとき何でアサガオは毎日水をやるのかがよくわからんだけども水をやるというふうに多分やってるんじゃないかと思って。

覇田氏 初めから完璧にできませんから、失敗あった方がいいんです。うちのはね、企業じゃありませんから、米取れなくても結構です。だから、子どもがやった失敗は、なぜそうなったのかを教えてやった方がはっきりわかります。手を切ったら痛いですよ。切らないうちからだめと言うのではなくて。

うちは、この事業とは別にジュニアカレッジというのをやってます。全然違った自然相手の。その中で、中学生が遊びに行って川で事故にあいました。1週間前。その後1週間もたたないうちに定例会があって、7月にいかだづくりをやる予定だったのですか、この間の事故で、「先生の方でこれからどうするかというのを悩んでいる」と会員から聞きました。だけれども、「やめるわけにはいかんよ」と。「やめたらみんな子どもたち楽しいことを、親が決めつけてみんな狭くしちゃう」と。「それをやるにはどうしたらいいかということを考えなさい」と。それと、フォローをする。こういうところへ本当に連れて行ってこうなると溺れるとか、ということを教えないと、これからみんなやるのが狭まれてくる。楽しいものもみんな大人が都合で縛っちゃう。

学校なんか今見ていると大変だなと思います、私達も先生と話していると。夜中に電話来るとか。危機管理のことをものすごく頭に入れているんです。その辺をもう少し考えてほしい。

やはりその前の練習なり、ただやめろじゃなくて、危険だからやめろじゃなくて、事故が起きたことは悲しいことです。ですから、洋服を着て川へ入ったりしたらどうなるとか、そういうことから訓練してやりなさいといっています。

奈須教授 おもしろいところに議論が入ってきたんですが、そろそろ時間ですので、最後に一言、言い残してること、言いたいことがあればと思いますが。

加藤氏 さっきのパワーポイントに書いてあったんですけども、行政とか教育委員会とか余りこの食育、こういった事業にかかわってもらいたくないということを書いていたんですけども。どうしても例えば緑森の田んぼ、さっきちょっと写真出てましたけれども、あれもボランティアだけでやってたんですね。そして、そのうち行政がいろいろ耕運機だとか脱穀機だとか揃えまして、ボランティアの出る幕がなくなってきたんですよ。そうしたら、もうボランティアだれも一人も出なくなっちゃって。行政だけでやってたんです。ところが、行政が破綻に近いでしょう、行えなくなってしまったもので、今度はそれを下請に出したんですよ、企業に。企業に出したら、今度は地域とのつながりがなくなっちゃいまして。

だから、その辺も考えると、本当に少しずつこちらのいいようにコツコツ積み上げていくことが大事だと思います。

靄田氏 やはり地域を学び地域に学ぼうと、やはり地域の子どもは地域で育てるのが一番だと思います。遠い親戚よりも近い隣の人ですね、それが一番じゃないかなと思います。子どもだってそうです。みんな同じです。悪いやつもいいやつも同じです。ただ、社会に出ていくとランク付けみたいな変なのがありますけれど。子どもはみんな同じです。

それと、やはりこういった食育とかそういったボランティアといいますが、やはりある程度の国の政策がもう少しはっきりしたものを作ってほしいですね。毎回2年くらいするところころ変わってくる。そういったことはやめてほしいなと思います。だから、これ何年続くかなというのが心配です。農林水産省が国家予算を通して食育についてもっと広めたいと。ただ広めるのはいいけれど、内容あるものを広めてほしいし。長くやってほしいです。よろしくお願いします。

奈須教授 だから、その意味でも食育は本当の意味の国民運動にならんといかんですよ。政府や行政だけじゃなくて。そういう方向になるようにぜひ行政にもうまい施策を作してほしい。なかなかうまく行ってこなかったという不満が僕らにはあって。だから、何よりもこういうのが動き出す前にこういう草の根でやっておられた方が日本中にいらして、そういう方たちが地域に根ざしているいろいろなものをつくっている、そこに学んだ政策展開、行政展開が大事で。それはもう僕は文教行政でいつもつらい思いをしてきました。そこを外しちゃうと絶対うまくいかんもんでね。

食は生きる限り大事なことから、あるいは食だけじゃなくて、生活をちゃんと考えていくということが何よりも大事なことから、これを1つの契機にして、ずっと続いていってほし

い。

あるいはもっと言うと、食育なんていうことを僕が言うのは、食育なんていう言葉をだれも言わなくてもみんながそういうふうに見ようような生き方ができて、その意味では食育という言葉が必要じゃない社会になれば一番いい。極端に言えばね。だから、そういうことがいなくなる、本当にそういうことを考えなくてもみんながよい食行動をとり、自然と共生し、地域が活性化して生きていくような社会になる日まで食育というのをできるだけいい形で頑張っていきたいと思うし、農政はそこにぜひ力を出していただきたいという願いで、今日は終わりたいと思います。

本当に今日は長い間ありがとうございました。（拍手）

5 . 閉 会

司会 ありがとうございました。

会場の皆様からのご意見やご質問したい方いらっしゃるとは思うんですが、奈須先生はこれから授業がございますので、もしそういう方がいらっしゃればアンケートにお名前と連絡先、内容をご記入いただければ事務局でおつなぎいたしたいと思います。

また、後ろに農業体験に関するパンフレットですとかパネルがございますので、ぜひごらんいただきたいと思います。

また、この1号館と2号館の間の左側にピラミッドがございますけれども、その中でも農業体験のパネルなどを展示しておりますので、ぜひお帰りにごらんいただきたいと思います。

では、今後も皆様方が地域において食育の活動の推進にご活躍いただくことをお願いしまして閉会といたしたいと思います。

パネリストの皆様、会場の皆様、ありがとうございました。（拍手）

アンケートは後ろの出口で職員にお渡しいただきたいと思います。お疲れさまでした。